

[書評]

定宜庄『最後の記憶：十六位旗人婦女的口述歴史』
(中国広播電視出版社, 1999年, 267頁)

綿貫 哲郎

著者定宜庄氏は、文化大革命直後から長く中央民族学院（現大学）の王鍾翰氏のもとで学び、現在は中国社会科学院歴史研究所研究員として活躍する満族の女性研究者である。氏はマーク＝エリオット（Mark C. Elliott）氏や李中清（James Lee）氏らの共同研究者としても知られ、欧米の研究手法を用いて研究する、中国大陸では数少ない歴史学・民族学研究者の一人である。これまで『清代八旗駐防制度研究』（天津古籍出版社, 1992年）や『満族的婦女生活與婚姻制度研究』（北京大学出版社, 1999年）などを出版しており、主に満族アイデンティティを専門とする研究者として認知されているが、それらの研究と並行して、同じ王鍾翰門下の劉小萌氏らとともに自身が経験した文革期の知青（知識青年）の記憶を掘り起こし、『中国知青事典』（劉小萌・史衛民・何嵐各氏との合著, 四川人民出版社, 1995年）や『中国知青史—初瀾（一九五三—一九六八年）』（中国社会科学出版社, 1998年）などを著作としてまとめ、世に送り出している。

文革期の知青研究ですでに培われた、オーラルヒストリーを援用した本書について、私は近現代の満族への問題関心から簡単な紹介をしてゆきたい。

本書は、禁旅八旗3名、八旗蒙古1名、外三營3名（健銳營營防・円明園營防・外火器營各1名）、東北4名（蓋州2名・瀋陽1名・双城堡1名・清原県1名）、駐防八旗4名（綏遠2名・河北北営1名、杭州1名）の1905年～1932年に出生した旗人後裔の女性16名の聞き取り調査の記録である。身分としては清朝宗室から一般旗人、母方が旗人という民人、東北で「降満」した旗人の子孫など多元的である。また、輝發那拉氏の子孫だと自称する老女からの三通の手紙も掲載している。著者によれば、満族という共同体が複雑であることから、できうる限り多くの来限と背景を持つ旗人と探し出したという。16名のうちには、満族と民族登記した八旗満洲旗人の後裔もいるが、旗人の後裔ながら、様々な事情で漢族やモンゴル族と登記している女性や、清代に旗下に編入されたが、今日漢族成分を回復した人など多彩である。

満族は近代において統治民族から被「駆逐」民族とされ、新中国成立後によりやく地位を回復したといわれている。旗人とその家族は、清朝政府から支給される「錢糧」で生計をたてており（俸餉制度）、民国期になっても

「満蒙回蔵各族待遇に関する条件」の第五条によって、従来どおり錢糧の支給は保証されていた。しかしながら、北京城内を除いてほとんどが1924年以前に支給が停止された。これ以降、長年にわたりかれらは経済的に困窮しただけでなく、社会的な民族弾圧とも直面することとなった。本書においても、民族圧迫から逃れるために、満洲姓から単姓の漢姓への変更、満族から漢族への民族変更など、これまでもよく知られた民国期以降における旗人後裔の女性が経験した労苦を多く収録する。

近代中国史において、これまで等閑視された旗人の後裔、しかも社会的弱者とされた女性の記憶を中心に据えた本書は、ジェンダー研究にも裨益する。およそ自分の出自や先祖・父母から説き起こされ、家族構成と兄弟姉妹の生活・経済状況、そして結婚相手や子育て、外戚関係、満族としてのアイデンティティにかんする内容で締め括られている。本書に登場する女性は、その多くが労働するだけでなく、ある者は革命に身を投じ、ある者は家が没落するや家族の生活一切をとりしきるなど、極めて行動的である。そのような女性は、気性が激しく、一方では負けず嫌いで忍耐強い。文中でもしばしば旗人男性を「怠け者」と斬り捨てる。

本書に載録された旗人後裔の女性は、すでに述べたように多元的ではあるが、実際には北京市及びその郊外、内モンゴル自治区のフフホト市、それから東北という限定された地域に偏っている。杭州出身者も1名含まれるが、物心ついた時には河北保定に移住している。清代旗人の居住であった華中・華南・西北の駐防八旗旗人に及んでおらず、近現代満族史の全体像を理解するまでには至らない。

ところで、著者が以上の多彩な女性たちの聞き取りから得ようとした問題点のひとつに、漢族と相対した場合、旗人出身の女性には自分の「民族」というものをどのように理解していたのかという問題がある。以下、この問題について簡単にみてみたい。

清太祖ヌルハチによって創設された八旗制は、清朝一代（実際には1924年、溥儀が馮玉祥によって紫禁城を追い出されるまで）続いたが、そのなかには八旗満洲旗人の後裔だけでなく、大量のモンゴル人・漢人・朝鮮人や露清国境紛争で投降したロシア人、そのほかベトナム人もふくまれる。満族とは、狭義では八旗満洲旗人の子孫のみを指すのであろうが、広義では旗人と同義語である。現在の中国においては、満族と民族登記できるのは、旗人の後裔であることが条件とされている。ところが、「民族」なるものは近代的な概念であり、その民族の「われわれ」意識には、共通の言語なり、価値体系なり、帰属意識なりのアイデンティティのあり方が問題となる。実際、「われわれ」意識はつねに変化している。仮に満族という「民族」を論じる場合、

やはり問題とすべきはどの時期の満族を対象としているのかである。民国初期には、八旗制にある人々を「旗族」という「民族」名で概括する動きもあったが、どうもうまいかなかったようである。

現在の満族という「民族」を論じるうえで欠かせないのは、少数民族優遇政策を等閑視できないと私は考えている。著者は詳しく言及していないが、本書にはそれをうかがわせるような記載が見られる。「彼女の長姉の子は大学受験を考えている。……（民族登記を）変えたよ。彼女は変えなかったけれども」（71頁）、「それが何の役にたつのさ。あなたはなんとか族が好きとか、そういうことは注意していないよ。職場でも聞かれない。ただ、あるとき主任に聞かれたことはあるが、私は『私はすでに漢化した』と答えたさ。彼は言ったね『そのように答えるものじゃない』と」（59頁）などである。

昨年度（2002年）、私が北京郊外の旗人関連史跡調査におもむいたとき、北京西南郊外の小さな鎮に集住する現地の人たちに「われわれは旗人の後裔だけれど、民族名はリーダーと話し合ってみな漢族とした。でも、今から考えると息子たちのためには満族にしておけばよかった」といわれたことがある。少数民族ならば、夫婦一組で2人の子供を生めるほか、大学受験などでは便宜をはかってくれるということもまた魅力なのであるが、文化大革命期の記憶も拭いがたい。上述の言葉からは、伝統ある旗人後裔の満族として民族登記するのではなく、少数民族優遇政策を享受できる身分としての満族ということに関心がスライドしていることを読みとることができよう。

本書をつうじて極めて興味深かったのは、東北の旗人後裔についてである。旗人・民人の界限が曖昧であり、満族意識が稀薄であるという。さらに、同じ旗人後裔でありながら、その入旗の状態によって「随旗」「在旗」と呼び分けられている点もあげられよう。前者は順治・康熙年間前後に山東省などから移住し、内務府旗人となった荘頭・荘丁の後裔を、後者は八旗兵丁の後裔を指し、明らかな区別が存在する。「随旗」は当然漢族であり、現在でも一部を除いてほとんどが満族ではなく漢族と民族登記しているという。これらは、従来旗人の子孫が満族とされたという通説を、聞き取り調査の面から一部否定した極めて重要な指摘であるといえる。

本書は一部知識人や革命幹部の口述を含んでおり、利用には注意が必要ではあるが、単純に歴史学的手法にとどまらず、人類学・社会学などを援用し、研究を押し進めている点で評価できよう。来年中には同じ著者によって、旗人男性をも含めた「口述歴史」本が出版されるという。旗人のオーラルヒストリーが完結するには、まだ早いようである。楽しみである。

（わたぬき てつろう：日本大学大学院博士後期課程）